

安藤次郎教授の経歴と業績

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/37183

安藤次郎先生のご退官にあたって

山 村 勝 郎

「経済論集」のこの巻は、このたび定年退官される安藤次先生のご退官を記念して編集されたものである。安藤先生は、昭和三〇年に金沢大学に赴任され、以来二十四年間、経済学科で統計学を教えてこられた長老教授であることは周知のとおりである。先生の白髪はたいへんみごとで、いかにも長老教授という感じであったが、われわれとお話しになる時の先生はなかなか若々しいので、もう定年を迎えられるおとしになられたのかと、びっくりしているようなわけである。

私は、先生とは専門分野も違うので、どういう研究をされているかはよく存じあげないが、私が本学に赴任する前から、安藤先生が金沢大学におられるという話は聞いていた。その時の話では、先生は一高在学中（多分、満州事変の始まった頃だろう）に社会科学の研究サークルを主宰されていたということであった。今日では社会科学という言葉は学問の一分野として通用しているが、当時は社会科学という言葉を使っただけで当局からにらまれるという時代であった。先生は東大に進まれてからも、そういう活動を続けられたということで、学生生活を日本の社会への批判的精神をもって送られた一人である。ご経歴を見ると、先生が大学を卒業された年は二・二六事件が起った年でありその後日本は中国への侵略を積極化して日中戦争をしかけ、ついには太平洋戦争へ突入して敗戦への道をたどる。その間、先生は満鉄調査部や中国現地機関におられて現実に日本の中国侵略の実態を見ておられたのであろう。先生は現在中国研究者として著名であるが、先生の中国研究の出発点は、日本軍国主義・帝国主義にふみにじられた中国、侵略に抗して立ち上る中国民衆への関心ではなかったらうかと想像できる。私も戦時中に学生生活を送り、大学に入

った時に学徒動員で徴兵された一人である。しかし、私の時代には大部分の学生は日本がなぜ戦争をしているのかについては盲目であり、無関心になっていた。ただ、戦争でやたらと自由が束縛され、生活が苦しくなったという体験しかなかった。その点で先生はすでに社会科学という知的武器をもって、開かれた目で、日本や中国さらには世界の動向を見てこられた先覚者である。先生の学問研究の出発点もまたそういうところにあつたのであろう。そして戦後には、日本の民主改革の時期に、民主化運動や労働や労働運動の指導者になられたことを考えると、先生の学問研究は、決して閉じられた大学内でのそれではなくて、先生が日本の歩んできた歴史の中で能動的に生きられ、その中で生まれた学問であつたということができよう。

戦後三〇年以上を経た現在の大学には、先生のような戦前派知識人、まして戦前から戦後にかけての激動の時代を科学者の目をもつとともに実践的に生きてこられた知識人は数少なくなつた。先生ご自身は、これまでの生きかたをあまりわれわれの前では口になさらなかったが、無言のうちにそれが先生の貫禄になつており、わが経済学科の大きな特色になつていた。先生が退官されると、もう経済学科には先生のような代表的戦前派知識人はいなくなる。その意味では、経済学科の歴史の中でも安藤先生のご退官は、一つの転期をなすということができらるであらう。

この世代交替という転期にあつて、われわれが先生から引き継ぐべきものは、なによりも経済学に取り組む態度であるように思う。先生にとって経済学は、体制批判ないし変革の科学であつたが、そのことを先生は戦前・戦後を通じて行動によって示された。そして、その中から先生の学風が生まれ、そういう学風をもっておられる先生の存在が、経済学科の伝統の源流になつている。戦後三〇年を経過するなかで、経済学の取り扱う対象や方法は変化し、発展したけれども、なんのために経済学に取り組むのかという、もっとも基本的な問題を見失つてはならないだろう。そのもっとも基本的なところで先生が残された知的財産を、われわれもうけつがねばならない。

ご退官とはいえ、まだまだ先生のお力によらなければならぬ課題を日本は多くかかえている。先生の今後のご健康とご発展をお祈りする次第である。

安藤次郎教授の経歴と業績

経 歴

大正二年十月七日生

昭和十一年三月 東京帝国大学経済学部経済学科卒業

同 四月 財団法人東亜経済調査局に勤務

昭和十四年四月 合併により満鉄調査部東京支社に勤務

同 八月 満鉄上海事務所調査室へ転勤

昭和十七年九月 上海共同租界工部局工業科監督官に就任

昭和十九年二月 上海特別市政府工業調査処副処長に就任

昭和二十三年 出版社「生活社」編集顧問となり、印刷出版労働運動に参加

昭和三十年二月 金沢大学法文学部講師

昭和四十四年十二月 同教授

業 績

論 文

○国勢調査における「従業上の地位」の概念について

○統計学の視点からみた二宮尊徳

○統計学界への「最大遺物」

——非運の統計学徒・一兵卒小島勝治の遺信について——

○生活水準の国際比較

○オーケストラと統計指標体系

○カール・ピアスンとニコライ・レーニン

——ピアスン「科学の文法」について——

調 査

○昭和45年国勢調査の指導員、調査員の体験を語る

○地方統計調査員の実情を語る

○ある地方世論調査員の体験談

学会報告

○統計の民主主義的前進への努力

○中国の統計教育の現状について

○新制大学教養部の統計学講義における一つの試み

○社会統計学者の任務についての一提言

○四角号碼検字法と平かな、片カナの数字表記法

講演記録

○統計のはたらきと統計の闘い

○統計概説

○統計調査の社会的条件

○利用される統計への努力

○市町村行政に役立つ統計的予測

○情報化社会の要求する市民像

著 書

「統計のための教養」

訳 書

カール・ピアスン「科学の文法」

I・アドラー「科学の道具」

L・ベルンシュタイン「経営者の統計常識」

楊 堅 白「統計理論の基本問題」

林 語 堂「中国における世論と新聞の歴史」

ジャック・ベルデン「中国は世界をゆるがす」

ニム・ウエールス「アリランのうた」

ジョン・ロビンソン「未完の文化大革命」

朱 徳「遊撃戦争を論ず」